『語学教育研究論叢』第29号

『海外奇談』における漢語攷
——傍訳を手掛かりとして——

于　増輝

A Study on Colloquial Chinese Vocabularies in Haiwai Qitan

Yu Zenghui

摘要

《海外奇谈》是在不改变故事情节的前提下，把《假名手本忠臣藏》翻译成汉文的作品，也叫做汉文小说。其作品首页右侧标有“鸿濛陈人重译海外奇谭”，所以很长一段时间以来，被认为是中国小说作品。但是，细阅文章内容，会发现很多不符合中文表达习惯的表达。近年来的研究表明，此作品是日本人假托中国人而创作的日本汉文小说。

此部作品全文用汉语写成，为了便于读者理解，作者在相应汉语的左侧注有日语解释。本稿以注有日语解释的汉语词为研究对象，研究汉语词的意思与日语注释是否对应，如有误用，探讨误用情况；研究日语的注释是否原为汉语词，可以表明汉语词在日语中被吸收的情况。以作者为日本人的汉文小说《海外奇谈》为研究对象，可以探求到汉语词汇在日语中被吸收及利用的情况的一端。

【キーワード】
漢文小説　傍訳　意味のずれる語彙、音読み

目次

0．はじめに
1．研究対象
2．先行研究
3．問題提起
4．研究方法
5．『奇談』における語彙
6．おわりに

0．はじめに

『海外奇談』は『仮名手本忠臣蔵』の筋や展開を換えず、中国語に訳した書物であり、日本漢文小説と呼ばれる。『海外奇談』の編者は清・鴻濛陳人となり、長い間、この作品は清人が訳したものと取り扱われた。中国の学者によるこの本の紹介では「一七九四年（清乾隆五十九年、日本寛政六年）鴻濛陳人の漢訳日本『仮名手本忠臣蔵』は題名『海外奇談』で全十回。これは中国文壇が日本の戯曲小説を漢訳したはじめである」と述べた。しかし、一度閲読したならば、本文を読み終えるに堪えないもので、これが中国人の書いたものでないことはわかる。近年、先学の研究により、『海外奇談』が中国人に仮託して創作した日本漢文小説であることは通説になっている。

本文は全部漢語で書かれ、補足説明として日本語の振り仮名が付されている。本稿は傍訳として付された漢語語彙を研究対象とし、中国語の漢語と日本語の傍訳の意味の対応関係を探求し、ずれがあれば、その状況を究明する。また、ほかの漢語の音読みにより、別の漢語の傍訳として、付した場合もあると思われる。このような用例を収集して、中国の漢語が日本語に定着した状況も明らかになると考えられる。日本人が作った漢文小説を研究対象にしてこそ、漢語語彙が日本語に使用され、受容された様子が更に伺えるのではないかと思われる。

1．研究対象

日本漢文小説である『海外奇談』（以下は『奇談』と略称する）を対象にする。

(1) 日本漢文小説について

日本人が漢文で書いた小説で、文体の模範を中国の文言小説や白話小説に倣っているが、その内容はおおむね日本で発生した事件で、かつ風俗習慣思想も日本古来のものである。

(2)『奇談』について

『奇談』は『仮名手本忠臣蔵』の筋や展開を換えず、中国語に訳した書物である。写本、10回、清・鴻濛陳人重訳であり、乾隆五十九年（寛政六年）正月上元鴻濛陳人題辞が付いている。原文に懶所先生の訓点と送り仮名、また振り仮名が施されており、序文には文化十二年（1815年）乙亥五月吉日、観成堂繡梓とある。

(3)『奇談』の版本

奥村佳代子氏2007により、以下の版本が確認できる。

①文化12年（1815年）　鴻濛陳人重訳海外奇譚『忠臣庫』（東京都立中央図書館所蔵）出版者名の記載なし。

②文化12年の刊記を持つ後印本『忠臣庫』　東都書林　山田佐助　湖東與兵衛（内閣文庫所蔵）

③文政３年（1820年）清鴻濛陳人重訳『奇談』京都書肆　出雲寺文治郎　大坂書肆松村九兵衛　東都書肆　山田佐助　前川六左衛門　*亀田鵬斎の「海外奇談序」を付す。

④文政8年（1825年）清鴻濛陳人重訳『日本忠臣庫』玉山堂　山城屋佐兵衛

⑤明治時代　清鴻濛陳人重訳『日本忠臣庫』　大坂心斎橋通西久太郎町　柳原喜兵衛　尾張名古屋本町八丁目　片野東四郎　東京日本橋通一丁目　北畠茂兵衛

『海外奇談』は大東文化大学図書館にも所蔵され、『海外奇談』（外題10回）清鴻濛陳人重訳　江戸、山城屋佐兵衛〈玉山堂〉蔵版/山城屋佐兵衛等、文

政2（1819）刊・後印となっている。

今回研究対象にしたのは大東所蔵版であるが、④番の文政8年の版本と照らし合わせたところ、内容は全く同じで、傍訳まで全く同じである。

2．先行研究

（1）香坂1983は『奇談』の訳者が中国人ではなく日本人であること、訳文中に見られる誤りの性質、訳語選択上に現れている時代性の不統一、訳者、重訳者の姓名・字・号の間接的な符合などから『奇談』を考証した。

（2）奥村2007では『奇談』について、以下のことを指摘している。

①『奇談』の文体――白話小説の体裁に似せて訳された。

②『奇談』の言葉――香坂順一氏によって示された日本人作と断定する語学的な根拠を否定し、唐通事の言葉の特徴であると断定した。

③『奇談』と『小説字彙』[1]――『海外奇談』は『小説字彙』に収録されている語句を用いて訳されている。また、香坂氏に示された日本人作と断定する語学的な根拠を否定したが、『奇談』の作者は『小説字彙』の誤字脱字を改めずにそのまま引用して、中国語の教養が高くないという角度から、『奇談』の作者は日本人であると言えるのではないかと指摘した。また、『海外奇談』の本文における「漆穿鴈嘴跗搭魚腮」の「漆」は「箭」の誤記であり、「不分皂伯」の「伯」は「白」の誤記であることは『小説字彙』を引用したことによると指摘した。

（3）荒木2011aは江戸期通俗物における漢語語彙について――『醒世恒言』巻三「賣油郎獨占花魁」翻訳三種の用例――で、漢語と合わないように見える不思議な振り仮名の用例を収集し、当時の日本人の漢語語彙に対する理解の様相を検討した。

（4）上述のほかに、『海外奇談』関係の主要論著に以下のものがある。

①石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』（清水弘文堂書房一九四〇年）

②鎌田重雄「『海外奇談』について」（『日本大学史学会研究彙報』第九輯、一九六五年）

③杉村英治「海外奇談―漢訳仮名手本忠臣蔵―」（三古会『伝記』第3輯、一九七九年）

④中村幸彦「日本人作白話文の解説」（『中村幸彦著作集』第7巻、中央公論社、一九八四年）

⑤嶋崎一郎「「海外奇談序」訳注」（『中国古典研究』第29号、一九八四年）

⑥村山吉廣「亀田鵬斉碑文序跋十種訳注解題」（『中国古典研究』第29号、一九八四年）

⑦陳慶浩「古代漢文小説弁識初探」（二〇〇一年）

3．問題提起

江戸時代に、中国の明、清の時代の白話は「唐話」と呼ばれる歴史を持ち、唐話学と呼びうる一大ジャンルを形成した。ただ実用の世界だけでなく、文人たちの関心を呼び、すこしずつ広がりを見せていた。このうち、典型的なのは、中国の白話小説が数多く日本語に翻訳され（タイトルに「通俗」と冠しているので、「通俗物」と呼ばれる）、または日本人の手によって中国語の小説も執筆された。通俗物には多くの漢語語彙がそのまま使われ、補足説明として日本語の振り仮名が振られている。中国語で書かれた漢文小説は尚更のことである。今回研究対象にするのは漢文小説の方であるが、まず通俗物の例を見てみよう。

荒木2011bによると、1761年ごろに成立したと推測される通俗物『通俗赤縄奇縁』では、語彙の左側に振られた仮名には以下のような例が見られる。

家火:ドウグ　主意：フンベツ　行燈：チャウチン

仮名はそれぞれ「道具」「分別」「提灯」に対する音読みである。つまり漢語語彙の傍訳として「別の漢語語彙の音読み」が用いられている。外来語としての新しい漢語語彙を解釈するために用いられる漢語は当時日本語にすでに定着したとしている。

本稿は以下の二つの面を明らかにするとし、目的とする。

(1)「『奇談』は日本人の作であろうと、中国人の作であろうと、中国人は先入観を持たずに通読しただけでも、常識的にそれが外国人の作だと分かる」

（陳2001）と言われるように、『奇談』の本文に不自然な漢語表現がいくつかある。また、漢語語彙の左側に振られる傍訳のうち、漢語語彙と意味がずれていると思われるものも存在する。そのずれている原因の一つは先学（奥村2007）がすでに指摘したように、『小説字彙』の誤字脱字を改めずにそのまま引用したによるが、『奇談』の本文に振られた傍訳を分析し、『小説字彙』と同じ語彙の日本語訳の意味は一致するかどうかを確認する。また、ずれている語彙を抽出して、すべてが『小説字彙』によったかどうかを確認し、ずれている具体様相を解明する。

(2)『奇談』における別の漢語の音読みが傍訳に当てられた漢語語彙を収集して、『奇談』の成立年代の1815年ごろ、何の漢語が日本語に定着されたか、漢語受容の一端を見ておきたい。

4．研究方法

『奇談』に見られる左側に傍訳を振られる600語を対象とする。中国文献の用例を参照し、本稿の目的と当てはまる語彙を分析する。

5．『奇談』における語彙と其の傍訳

(1)『奇談』の本文から抽出された600語彙のうち、傍訳は『小説字彙』と一致するのは26語で、表１の通りにまとめた。

表１

頁数	番号	語彙	傍訳	備考 <小説字彙>
3b	1	軟的朘眼	イヤラシイメツキヲシテ（厭らしい目付きをして）	イヤラシキメツキナリ
4a	2	眉花眼笑	ヱシャク（会釈）	ヱシャクスルコト
5a	3	轉央	マタダノミ（又頼み）	マタダノミ
5b	4	甑已破	トテモヌレタソテジャ（とても濡れた袖じゃ）	トテモヌレタ袖ジヤ
5b	5	一不成二不休	ドククラハバサラネブル（毒食らわば皿舐る）	スルカラハシヌクト云コト又毒クハヽサラト云ガ如シ
6a	6	刁蹬人手	ムホウノヒト（無法の人）	人手：タダ人ト云コト手ノ字ニ意ナシ　刁蹬：ワルモノモガリ

6a	7	較些子	カウナクテカナハヌハズ	コレデコソ道理ニハアタレト云フヤウナ詞ナリ
6a	8	大氣概	タイシン	大シンダイ
8b	9	憊賴	イガミカヽツテ（唖かかって）	人ヲ罵ル辞。イガミ
9a	10	窩盤	オトギ（御伽）	キゲントル
12b	11	擠撮	アナトリ（侮り）	アナトルコト
13a	12	一五一十	イチブシジウ（一部始終）	チブ始終
13a	13	小覷	ミアナトル（見侮る）	ミアナドル也
13b	14	不兜攬	アイテニナラス（相手にならず）	アイテニナラヌコト
16a	15	一遞一答	ヤツヽカヘシツ	ウケツナガシツ
16a	16	説在熱鬧處	ハナシノサイチウ（話の最中）	ハナシノサイ中
16b	17	方纔	ハジメテ（初めて）	イマガタ。ジメテ。ヤウヘ
16b	18	丟個眼色	メクバセシ	メハジキ
17a	19	板板地	インギンニ（慇懃に）	インギンナコト
21b	20	歆艶	ウラヤマシヒ（羨ましい）	ウラヤムコト
21b	21	不分皀伯	アトサキナシニ（後先なしに）	アトサキナシ
22a	22	爭些兒	アブナイコト（危ないこと）	アブナヒカゲンデ。スデノコトニ
22b	23	多情種子	スイナ（すい目）	スイナ人
22b	24	壁廂	ズンド（ずんど）	這壁廂ハコノズンドト云コト又カタワキヲ壁廂ト云総ジテアノズンドナドト物ヲ指テ云コト
22b	25	意意侶侶	キマヽニシテ（気ままにして）	キマヽスルコト
23a	26	薄幹	ヨウジアリテ（用事あり）	自身ノ用事謙退シテ云

（一）表の内容を分析すると、以下のことが分かる。

①『小説字彙』の訳と似通っているのは、3、4、13、16、21番で、合計五語である。

②『小説字彙』の訳と部分的に一致するのは、1、2、5、8、9、11、12、13、14、17、19、22、23、24番で、合計十四語である。

③『小説字彙』の訳の意味と同じでありながら、別の表現を使うのは、6、7、15、18、20、25、26番で、合計八語である。

④両者の訳が違って、『奇談』のほうが更に適切だと思われるのは10番である。

上述した内容からみると、両者の訳は全く一致するあるいは部分的に一致するものが多い。『奇談』は『小説字彙』を引用したことが確かであろう。10番のように辞書より更に適切な訳を使って本文に付したことは、作者が中国語にかなりの理解力を養成されたことが伺えると思われる。

（二）上述した語彙の中で、中国文献での用例と、意味がずれると思われる語彙を以下の通りにまとめた。中国文献の例文及び出典を明記し、『奇談』の原文も列挙する。

①甑已破（トテモヌレタソテジャ）

a. 巨鹿孟敏、客居太原、荷甑堕地、不顧而去。泰見而問其意、対曰、甑已破矣、視之何益。（『資治通鑑』）

（巨鹿の孟敏は太原に流浪していた。背負っていた甑が地に落ちても全く顧り見ずに去って行った。泰はそれを見て、その心を問った。甑は已に割れ、それを見ても何の益があろうかと答えた。）

「甑已破」は「甑が割れる」、また「既に事実になり、もう後悔しない」という意味で使われたことが分かると思われる。

b. 若没有好回話、甑已破、一不成二不休。（『奇談』）

（もしよき返事がなければ、甑はすでに割れたものだ。毒を食らわば皿まで。）

『奇談』本文の「甑已破」に「トテモヌレタソテジヤ」と振られた。日本語に「濡れぬ先こそ露をも厭（いと）え」という文があるが、「濡れる前は露でさえ気になるが、一度濡れた以上はどんなに濡れてももうかまわない。いったん、あやまちを犯してしまえば、もっとひどいことをもはばからない」の意である。原文の文脈から見れば、「甑已破」の後文の「毒を食らわば皿舐る」という繋がりを考えると、「トテモヌレタソテジヤ」は「濡れぬ先こそ露をも厭（いと）え」と類似的な使い方で、同じニュアンスではなかろうか。つまり、作者は「（高師直）告白が断られたので、すでに面子を潰され、更にひどい事をしてもいい」という意味で使おうとしたのではないかと考えられる。中国文献の「断念する」とニュアンスが違うと思われる。この傍訳は

『小説字彙』で確認できるが、『小説字彙』の「甑已破」の出典が確認できず、最初は文脈によって派生された意味を振られたかどうかを更に考察する必要があると思われる。

②較些子（カウナクテカナハヌハズ）

a. [黄檗希運禅師]裴相国一日請師至郡、以所解一編示師。師接置於座、略不披閲、良久曰：会麼？裴曰：未測。師曰：若便恁麼会得、犹較些子、若也形于紙墨、何有吾宗？『五灯会元・第四巻』

（裴宰相はある日師を招いて郡まで至った。彼が理解したところの一編を師に示した。師はそれを座に於いて少しも読まなかった。ややしばらくして、裴に「分かったか」と聞いた。裴は「まだ分からない」と答えた。師曰く、若し悟ったとしても、精々僅かであろう。もしそれを全て筆墨で表すことができたら、わが宗はどうして存在しようか。）

中国文献において、「少し」の意味である。

b. 全靠我指點端正這個在此、款款定（ママ）要判官事事停當、較些子、大気概的判官也尚似個。（『奇談』）

（今回塩冶判官の任務は、何もかも私【高師直】の指示に頼る。私たち【高師直、甲活欲】はここでこのことについて協議している。判官【塩冶判官】が絶対に何もうまく行くように願っている。こうような心構えは当たり前である。地位が高い判官はまだこうするから。）

この語について、中国文献との使い方が違うのははっきり分かる。『小説字彙』も誤用されたと考えられる。

③争些兒（アブナイコト）

a. 想人生待怎麼、貴比我争些兒大（du）、富比我争些兒個。（元・喬夢符『殿前歓・懶雲窩』）

（人生というのはなんだろう。貴は私にとって大したことではないし、富は私にとっては大したことでもない。）

b. 欲待再上山去、方纔驚諕的苦、争些兒送了性命。不如下山去罷。（『水滸伝』第１回）

（又山に登ろうと思ったが、さっきはあまり驚いて、もう少しで命を落とすところだった。いっそ山を下りたほうがましだ。）

中国文献において、「もう少しで、殆ど」の意味だと思われる。

c. 我是執政重臣、低頭拱手来要求免罪、但是兄長能辨幹事的人、教下官宥殺死了。儻若外人如此、必定我此首領一轱辘、争些兒、不瞞哥哥説、那一天就在你的背後、合掌下拜。（『奇談』）

（私【高執政】は執政の重臣で、頭を下げて寛宥を求めている。兄（若狭介）は分別がある方で、兄に頭を下げてもいいが、若しほかの人に謝罪しなげればならないなら、私は絶対死を選ぶ。危なかった。兄さんを騙さないが、あの日、あなたの後ろで、合掌して、拝礼した。）

『奇談』の本文に「アブナイコト」と付された。中国文献の意味は「もう少しで、殆ど」の意味であり、副詞の使い方で、動詞の前に置くのが一般である。また、「較些子」、「争些兒」は中国語に於いて、品詞はそれぞれ名詞、副詞であるが、意味は同じである。『奇談』においては、異なる傍訳を付されている。

④壁廂（ズンド）

a. 那厮隊里四個蛮子、四条槍、便来攢住了、俺這壁廂措手不及、以此輸与他了。（『水滸全伝』第83回）

（あのやつの隊に四人の南方人がいて、四本の銃を持って、こちらに攻撃しに集まってきた。私のところは対処しようがなくて、彼等に負けたのだ。）

「この辺、ここ」の意味であると思われる。

b. 高執政道、有甚貴恙、把薬剤来與你服、若狭介道、壁廂不消費心。（『奇談』）（高執政が言うには、お尊体は大丈夫ですか。薬を持ってあげる。若狭介が言うに、全くお気遣いなさらぬように。）

「ずんど」はロドリゲスの日本大文典の例では、「音響や物事の状態を意味するもの」を語例として、「ずいと」、「ずっと」、「ぞろりと」などとともに挙げているもので、意味についての説明はない。他に、「ずんど」の例は近世以降の文献に見えるが、それらは、「ず」、「づ」が同意になって、語源

的に「づんど」と推定される。「づんど」は「勢いよく突然に事をするさま、程度ははなはだしいさま、下に打消しの語を伴って、決して、少しも」の意味である。原文の「壁廂」の下は否定形であるから、「下に打消しの語と伴って、決して、少しも」の意味であると思われる。

c. いや、ずんど痛みもござらぬ。（滑・浮世風呂・前上）

d. ずんどよめぬ〈正体のわからぬ〉婆あだわえ。（伎・助六）

中国文献における「この辺、ここ」の意味に対して、日本語は「少しも、決して」である。「壁廂」は日本語における使用状況を更に考察する必要があると思われる。

(2) 600語のうちに、『小説字彙』からの引用を確認できなく、中国文献を参照し、意味がずれると思われる語彙は以下の表2にまとめた。

表2

頁数	語彙	傍訳
3a	不合	ブレイ（無礼）
5b	装做愰子	グワイブンヲカヽス（外聞を斯かす）
6a	乾顙	ソシラヌカホテ（素知らぬ顔して）
10a	古撇	カタクロシイ（堅苦しい）
10b	體量	スイリャウシ（推量）
16a	把柄	トリエ（取り柄）
24a	這般田地	カやウナバシヨ（このような場所）
26a	寧耐	アキラメテ（諦めて）

①不合（ブレイ）

a. 相公不合煩悩合歓喜、這的是不曾使一分財礼、得這等花枝般媳婦。（元・白仁甫『墻頭馬上』）

（公子は悩むのではなく、喜ぶべきだ。金品一円もかからずにこんなにきれいなお嫁さんを得たとは。）

「すべきでない」の意味だと思われる。

b. 俺又有幾分不合時宜処、毎毎見奸党専権、蒙蔽朝廷、因此無志進取。(『水滸全伝』第90回)

(俺はまた幾分にこの世に適応できない。悪党が大権を一手に握って、朝廷を欺くのを見ると、向上する気にならない。)

「符合ではない、適応ではない」の意味である。

c. (高師直は若狭介に対して) 不等旨命、挿口議論、萬萬不合。(『奇談』)

(謹んで旨命を待つのを為さず、口を挿んで議論することは、無礼のことである。)

作者は「ぶれい」のつもりで使おうとしたが、中国文献において、「不合」は「ぶれい」の意味ではなく、意味がずれると思われる。『小説字彙』に見つからないが、作者によって派生された意味か、ほかの唐話辞書からの引用かを更に考察する必要があると思われる。

②装做愰子 (ガイブンヲカヽス)

愰:揺れ動く、ゆらゆら揺れる。近代漢語には、「愰子」という言葉がなく、「幌子」の誤記だと考えられる。中国文献で確認できたのは「装幌子」である。

a. 因怕老婆嘴舌又利、喉嚨又响、恐被隣家聴見、反装幌子、敢怒而不敢言。(『醒世恒言』第30巻)

(彼は妻の口がうまく、声が大きいので、隣家に聞かれたら、ばれるのを恐れて、怒るが言えない。)

「事情を世間に知らせること。主に悪事を指す」の意味であると思われる。

b. 却是師直手澤的情書、慌忙不住、肚裏尋思道、儻若胡亂教他喫醜了、是倒教丈夫装做愰子。索性拿了回去、叫丈夫看。(『奇談』)

(【甲活欲は見たら】却って師直が手で書いた情書である。慌てて思った。若し彼に恥をかかせば、これは却って夫に面目を失わせる。いっそ家に持ち帰って、夫に見せる。)

悪事を知らせたら、面目を失うだろうが、『奇談』の意味はちょっとずれていると思われる。

③乾顙 (ソシラヌカホテ)

a. 周三那厮、打出吊入、公然乾顙。計安忍不得、不住和那周三厮鬧。（『警世通言』第20巻）

（周三のやつめは公然に騒ぎを起こす。計安は耐えられなく、絶えず周三と殴り合う。）

「大声で吼えて、騒ぎを起こす」の意味だと思われる。

b. 我新娶一個老婆在家里、乾顙我一夜不帰去、我老婆須在家等、如何是好。（『警世通言』第14巻）

（私はもらった嫁が家にいる。私は無駄に一夜帰らないなら、妻は家で待たなければならない。どうしたらいいか。）

「空費する、むだに消耗する」の意味であると考えられる。

c. 高執政被他通知、乾顙説道、你又来怎敢拒我。（『奇談』）

（高執政は彼に知覚され、平然として言い出して、君はまた敢えて我を拒むなんで。）

『奇談』に「乾顙」は「ソシラヌカホテ」と付されたので、「平気」、「平然」、「何にも知らないような顔で」の意で使われたのであるが、中国文献にはこの意味の使い方はない。本文の「君はまた敢えて俺を拒むなんで」という文脈から、高師直が怒るのは明らかで、「平気な顔」だったら、やはり少しおかしいと思われる。これは作者によって間違って付されたか、作者がほかの辞書を参照したかを更に考察する必要があると考えられる。

④古撇（カタクロシイ）

a. 人問你則推道是探親、你可休淹泪眼新痕圧旧痕、你且装些古撇温淳。（元・鄭庭玉『後庭花』）

（人に聞かれたら、親族を訪ねると託けてください。あなたはもう泣かないで、あなたはちょっと偏屈であることを装ってください。）

「偏屈である。ひねくれている。可笑しい」の意味だと思われる。

b. 托那設叫女兒坐過近前、説道、父親常雖古撇、如今説的話、應該教你見使人、誰想叫我接着、多少差了母親的心。（『奇談』）

（托那設は娘を近くまで呼んできて、坐らせて言った。お父さんはよく偏

屈しているが、さっきはあなたに使者を会わせるつもりのはずだった。思わず私は此のことを受け取ったなんて、多少私の気持ちと違う。)

『奇談』に「カタクロシイ」と付されたが、「おかしい、偏屈する」の意味と少し合わないと考えられる。

⑤體量（スイリヤウ）

「體量」は「體諒」の誤記だと考えられる。

a. 客人、你要體諒我的下情、我是開店的人、靠這生涯過日。(『飛龍全傳』第13回)

(お客さん、私の状況を考えてください。私はお店を出す人間だ。この店に頼って日を送る。)

「相手の気持ちを考える。他人の立場で考える。察する」の意味であると思われる。

b. 諒必你也要見丈夫、替我母親迎接好麽、可那美羞渋、怎地出得半句答應、就做紅臉、直覚個可愛、母親快體量女兒的心。(『奇談』)

(思うにあなたも夫に会いたいし、母の私の替わりに接待してあげたらいいか。可那美は照れくさくて、一言も言えず、ただ顔が赤くなって凄く可愛く見える。母親は娘の気持ちを察している。)

『奇談』本文に「スイリヤウ」と付された。「推量」は「推し量ること、推測」の意で、「察する」とニュアンスが違うし、意味も違うと考えられる。

⑥把柄（トリヱ）

a. 四娘爲人第一忌刻、第二隠細、若不乗此拿住他一個把柄、将来只怕不得這好機会。(『林蘭香』第41回)

(四娘という人は酷薄で、用心深い。若しこのチャンスに乗じて彼女の弱みを握らないなら、恐らく二度とこんなにいい機会がない。)

「(交渉や強迫に利用される）弱み」の意味と思われる。

b. 我要托活佳兒撮合做媒、更是有把柄之処、他（甲活欲奶奶）断然不肯、該應要叫丈夫得知就里、但是不教他知道。(『奇談』)

(私は活佳兒に頼んで仲人をしてもらった。更に私の弱みを握られた。彼

女は私の恋しい気持ちを受け止めてくれなかったなら、道理上彼女はこのことを主人さんに教えたはずだが、教えてあげなかった。）

『奇談』に「トリヱ」と付されたので、作者は恐らく「きっかけ、動機」の意で使おうとしたのではなかろうか。中国文献の「把柄」は「弱み」の意であり、少しずれがあると思われる。

⑦這般田地（カやウナバシヨ）

a. 若其義理微妙処、等你学到他這般田地時、我再与你説。（明・丘凌『忠孝記』

（その義理の細かいところについて、あなたは彼の境地まで悟れば、私はまたあなたに教える。）

「状態、境地」の意味であると思われる。

b. 明皇得知、将安禄山差去漁陽田地、做了節度使。（『大宋宣和遺事』）

（明の皇帝はそれを知り、安禄山を漁陽のところに行かせ、節度使とさせた。）

「場所、所」の意だと思われる。

c. 今日是殿下公事冗忙、連我也擺撥不開、顧不到這般田地。（『奇談』）

（今日は殿下がとても忙しく、私まで暇がなく、この状況を構っていられない。）

「田地」は確かに「場所」の意味があるが、ここは明らかにaの使い方になる。作者は知りながら、そのうちの一つの意味を注として、付したのか。

⑧寧耐（アキラメテ）

a. 却教紅蓮坐在厨中、分付道、飯食我自将来与你喫、可放心寧耐則個。（『古今小説』第30巻）

（紅蓮を厨房に座らせ、ご飯を私は持ってきてあげるから、安心して我慢したらいいと言い付けた。）

「辛抱して、我慢する」の意であると思われる。

b. 你且和我去我的爺娘家、雖他在村落中、實是慨爽人、你如今遇着這般時蹇、也是寧耐、前世注定。（『奇談』）

（あなた【早野勘平】は私【活佳児】と両親の家に行ってくださる。彼ら

は田舎者だが、実に気前がいい人である。現在こんなにひどい目にあって、もう諦めるしかない。これは前世に定めたことである。)

「寧耐」は中国語で「辛抱して、我慢する」の意味であり、「諦める、断念する」の意味はないと思われる。

以上八例の分析をまとめてみると、以下のようになる。

a. ①、②、③、④番目は、誤用された使い方を文脈上から見れば、意味は通じるが、これらは作者によって派生された使い方か、ほかの文献か辞書を参照したのか、更に考察する必要があると思われる。

b. ⑤、⑥、⑧番の傍訳は、中国文献の意味とずれが大きいと思われ、その使用状況を詳しく調べる必要があると考えられる。

c. ⑦番は、中国文献に二つの意味があり、作者はよく使われたほうを付したか。

(3) 漢語の音読みにより別の漢語を解釈している語彙

①『奇談』から抽出した600語のうち、漢語の音読みによって、別の漢語を解釈している語彙は表3にまとめた。

表3

頁数	語彙	傍訳
3a	不合	ブレイ（無礼）
9b	随口説的話	フンベツナキハナシ（分別なき話）
10b	體量	スイリャウ（推量）
12a	繊細	イサイノワケヲ（委細のわけを）
13a	苦勧	イケン（意見・異見）
14b	休退	リベツ（離別）
16b	親身	ジシン（自身）
16b	放心	アンシン（安心）
18a	排式	ギシキ（儀式）
20b	火票	クワキウ（火急）
20b	黄絹幼婦	キミャウヘ（奇妙奇妙）
22b	懐悔	コウクワイ（後悔）
22b	衝撞	リョグワイ（慮外）
23a	指教	シナン（指南）
23b	好生有福	ゴウセイニシアハセモノ（強勢に幸せもの）
23b	索鬧剗地	シカケダケンクハ（仕掛けた喧嘩）

25b	闘毆	ケンクワ（喧嘩）
25b	来由	シダイ（次第）
25b	鎖押	ヘイモン（閉門）
26a	注定	ヤクソク（約束）
26b	准備	カクゴセヨ（覚悟せよ）
26b	調和滋味	リャウリノアンバイ（料理の按配・塩梅・按排）
27a	将包容	ヨイカゲンニリャウケンシ（良い加減に料簡してテ）
27a	惋情	ザンネン（残念）
29a	體量	リャウケン（料簡）
29a	欽差	ジャウシ（上司）
29b	流徒	エントウ（遠島）
29b	濫悋	リンショク（吝嗇）
31a	准備	ヨウイ（用意）

表から分かるように、「分別」、「推量」、「委細」、「意見」、「離別」、「自身」、「安心」、「儀式」、「火急」、「奇妙」、「後悔」、「慮外」、「指南」、「強勢」、「前方」、「喧嘩」、「釣瓶」、「次第」、「閉門」、「約束」、「覚悟」、「按配」、「按排」、「加減」、「残念」、「料簡」、「上司」、「遠島」、「吝嗇」、「用意」を用いて、それぞれ対応する『奇談』の原文の漢語を解釈した。この意味で、これらの漢語語彙はすでに当時の日本語に定着し、少なくとも『奇談』の成立年代の1815年ごろ使われていたと言えよう。

②傍訳として使われた漢語語彙は中国近世文献[2]の存在状況を探求し、確認できたのは表４にまとめた。

語彙	近世文献
分別	大唐三蔵取経詩話、元刊雑劇三十種、水滸傳、西遊記、金瓶梅
意見	水滸傳
離別	永楽大典戯文三種、元刊雑劇三十種、水滸傳、西遊記、金瓶梅
自身	大唐三蔵取経詩話、関漢卿戯曲集、水滸傳、西遊記
火急	西遊記、金瓶梅
奇妙	元刊雑劇三十種、水滸傳
後悔	大唐三蔵取経詩話、全相平話五種、関漢卿戯曲集、元刊雑劇三十種、老乞大諺解、 朴通事飛諺解、水滸傳、西遊記
喧嘩	水滸傳
次第	水滸傳、西遊記、金瓶梅
約束	元刊雑劇三十種、金瓶梅

加減	元刊雑劇三十種、老乞大諺解、水滸傳、西遊記
上司	大唐三蔵取経詩話、水滸傳、西遊記、金瓶梅
吝嗇	水滸傳
用意	水滸傳

a. 出典が確認できたこれらの漢語語彙の中に、中国近世文献に影響され、日本語に定着した語彙がある可能性が高いと思われる。もちろん、作者が違う同時代の日本文献を数多く考察すればするほど、更に証明できるだろう。また、漢語語彙が日本語に定着する全体様相を把握するには、語彙使用の変遷などを明らかにするには、『奇談』より早く成立された日本文献、また『奇談』より遅く成立された日本文献を考察する必要があると考えられる。

b.『奇談』は『水滸傳』に影響されると言われる。上の表にある語彙、「火急」、「約束」以外の十二語について、『奇談』の作者は直接に『水滸傳』の語彙を参照したとは言い切れないが、十二語が全部『水滸傳』に見られるのは偶然ではなかろう。

③近世文献に確認できなく、中国古代文献[3]に存在することが確認できたのは以下の通りである。

「無礼」、「推量」、「委細」、「安心」、「儀式」、「慮外」、「指南」、「強勢」、「閉門」、「覚悟」、「按排」、「料簡」、「遠島」であり、これらの漢語語彙はより早く日本語に定着した可能性が高いと思われる。

6．終わりに

本稿は中国近世漢語の意味とずれる傍訳、漢語の音読みにより別の漢語を解釈する語彙という二つの面で、『奇談』の本文の漢語を考察した。まず、中国近世漢語の意味とずれる傍訳について、全部で十二例を分析した。その誤用した原因として、『小説字彙』からの引用か、作者によって派生された使い方か、ほかの文献、辞書を参照したかのどれかと考えられる。次に、漢語の音読みにより別の漢語を解釈している語彙を分析し、『奇談』が成立された当時に日本語に定着された漢語語彙の一端が伺えたと信じる。また、『小説字彙』から引用しなかったと確認できた語彙については、どうしてそのよ

うな傍訳を付されたか、他の日本文献での詳しい使用状況を考察することは今後課題にしておきたい。

注

1．日本で初めて小説の語句を集め、小説専門の辞書であると銘打って出版された『小説字彙』は、寛政三年（1791）に初版され、著者の秋水園主人については、未詳である。そのうちは脱字誤字が多く、語句の解釈にも誤りが多いと言われる。

2．近世漢語語料庫（http://dbo.sinica.edu.tw/Early_Mandarin/）

3．中国古典文献データベース

参考文献

1．奥村佳代子『江戸時代の唐話に関する基礎研究』関西大学出版部2007

2．石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』清水弘文堂書房1940

3．香坂順一『白話語彙の研究』光生館1983

4．鎌田重雄「『海外奇談』について」『日本大学史学会研究彙報』第九輯1965

5．杉村英治「海外奇談―漢訳仮名手本忠臣蔵―」三古会『伝記』第3輯1979

6．中村幸彦「日本人作白話文の解説」『中村幸彦著作集』第7巻 中央公論社1984

7．嶋崎一郎「「海外奇談序」訳注」『中国古典研究』第29号1984

8．村山吉廣「亀田鵬斉碑文序跋十種訳注解題」『中国古典研究』第29号1984

9．陳慶浩「古代漢文小説弁識初探」『日本漢文小説の世界―紹介と研究―』日本漢文小説研究会編2001

10．許少峰編『近代漢語大詞典』中華書局2008

11．中田祝夫等編『古語大辞典』小学館1983